

阿佐ヶ谷ワークショップ 講演録

日本の沙翁劇・英国のシェイクスピア劇
— 受容を通して見る日本文化 —

佐々木 隆

目 次

はじめに	2
(第1部)	
日本のシェイクスピア—受容を通して見る日本文化—	
1 「日本のシェイクスピア」とは	3
2 日本のシェイクスピア受容史概略	3
3 日本のシェイクスピアを考える	20
4 世界と日本	21
5 2つの最近の傾向	22
6 朗読	26
(第2部)	
加藤泰監督 映画『炎の城』(1960)	29
笑福亭松之助 落語「じゃじゃ馬ならし」(1966)	30
当日の配布資料より	32
あとがき	47

はじめに

この講演録は阿佐ヶ谷ワークショップで私自身が話した内容をまとめたものである。阿佐ヶ谷ワークショップは荒井良雄先生がシェイクスピア生誕 450 年、シェイクスピア没後 400 年を記念して企画したもので、2014 年から開始されたものである。今回、私自身が講演した「日本の沙翁劇・英国のシェイクスピア劇 ―受容を通して見る日本文化―」（2015 年 3 月 7 日）の内容をまとめた。

阿佐ヶ谷ワークショップの主宰者である荒井良雄先生は大学院時代の私の恩師でもあるが、私が専任教員となり、恩師の前で本格的に長時間の講演を行うのはこの講演が実は初めてのことであった。2014 年 10 月に講演の依頼が恩師より直接あった。当初は 2015 年 1 月下旬の予定であったが、最終的に 2015 年 3 月 7 日に講演となった。講演のタイトルも荒井先生が付けて下さった。それだけに私にもまた、荒井先生にも思入れがあったと思う。その後、荒井先生はシェイクスピア没後 400 年を待たずして、2015 年 4 月 8 日に亡くなってしまったため、私には忘れることができない講演となった。荒井先生が楽しみにしていた 2016 年 4 月 23 日のシェイクスピア没後 400 年も過ぎ、あらためて 1 年前の講演をまとめることとした。実際の講演では最初の 90 分をパワーポイントを活用しながら進め、10 分程度の休憩をはさみ、後半 40 分で加藤泰監督『炎の城』の抜粋上映、落語『じゃじゃ馬ならし』を紹介した。

(第1部)

日本の沙翁劇・英国のシェイクスピア劇
— 受容を通して見る日本文化 —

1 「日本のシェイクスピア」とは

講演を進める上で「日本のシェイクスピア」の簡単な定義をしておきたいと思います。英語では Japanese Shakespeare, Shakespeare in Japan, Japanized Shakespeare となるかと思いますが、これを通常で考えると次の3つが想定できます。

- 1) 日本国内で実践されたシェイクスピア劇上演、映画、研究等
- 2) 日本人が国内外で実践したシェイクスピア劇上演、映画、研究等
- 3) おもに日本人が日本で実践したシェイクスピア劇上演、映画、研究等

今日は3番目を中心にしますが、もう少し補足して次のようにしたいと思います。

シェイクスピアの翻訳、研究、上演（朗読を含む）、さらにシェイクスピア（作品）を創作のヒント（依拠）にした新たな創作作品（映画、音楽、絵画等）を含め、こうした一連の活動を「シェイクスピア活動」(Shakespeare Activities)

2 日本のシェイクスピア受容史概略

①明治以前（江戸時代）

まず、日英交渉史・日英交流史から少し振り返ってみましょう。シェイクスピアが生まれたのは1564年、同じ年にはウィリアム・アダムズも生まれています。日本で言えば、戦国時代で、織田信長、豊臣秀吉、

徳川家康達の時代です。日本では天下分け目の関ヶ原の戦いのあった1600年にイギリス人航海士・アダムズの乗った船が豊後（今の大分県）に漂着した。イギリスと日本の付き合いがここから始まります。1613年にはクローブ号が平戸に入港し、司令官ジョン・セーリスはアダムズを伴い、江戸に赴き、徳川家康と徳川秀忠に謁見し、ジェームズ一世の親書を渡した。1616年にはシェイクスピアが亡くなり、同じ年には徳川家康も亡くなっている。1639年にはオランダと中国を除く外国との交流・貿易が制限された。鎖国となります。イギリスとの関係ともここで一端止まることとなります。

鎖国は外国からの影響が極端に少なくなり、日本文化の熟成期を迎えました。ここでシェイクスピア作品と類似したプロットのある作品が登場します。これまでのシェイクスピア受容研究でも紹介されているところです。『ヴェニスの商人』の人肉裁判や『ロミオとジュリエット』の仮死状態になるプロットが盛り込まれています。

1695年 近松門左衛門『釈迦如来誕生会』（初演）

1771年 近松半二『妹背山婦女庭訓』（初演）

鎖国の時代であるため、近松門左衛門や近松半二がシェイクスピアを読んでそのプロットを利用し、翻案したとするには無理があります。

ここで日本とイギリス、あるいは日本人と英語を考える時にどうしても触れておかなければならないことがあります。よく英語教育史で紹介されますが、1808年のフェートン号事件というのがあります。オランダ船を装ってイギリス船が長崎の港に入ってくるという事件がありました。平和ボケのため防衛が緩くなっていたことやオランダではなく、イギリスの影響力が大きくなってきたことが背景としてありました。この事件を契機に1809年に幕府はオランダ語の通訳（蘭学通詞）に英語学習を命じることになりました。これが日本の英語学習・英語教育の原点ということになります。当時は英語の話せるオランダ人よりオランダ語で英語を習ったということになります。

1808 年以降はこうした背景から幕府のごく限られた人とは言え、鎖国中にもかかわらず、英語を学ぶ機会があったのです。イギリスにかなりの脅威を感じ、相手を知るために英語を学ばせたというところではないでしょうか。この時期に歌舞伎で『ヴェニスの人肉裁判』と類似の話が盛り込まれた 1810 年の四世鶴屋南北・二世桜田治助『心謎解糸糸』(初演)が登場します。英語学習が開始されてから『ヴェニスの人肉裁判』に類似したプロットが登場するとなると、先ほどのふたつの作品とは異なり、学問上、はっきりと証明ができませんが、ひょっとしたらシェイクスピアの作品が紹介されたとかかもしれない考えると楽しくなります。

さて、先ほどの幕府に英語学習を命じられた本木正栄は 1814 年に『諸厄利亜語林大成』という日本で最初の英和辞典を作り上げるのです。日本語、オランダ語、英語が並列されています。英語学習・研究が始まったわずか 5 年程度で英和辞典が編纂されたわけですから、ただただ驚くばかりです。

幕府がイギリスに注目して 30 年程すると、イギリスはアジアに進出して来る事件が起きます。清でもイギリスの進出を危惧していた人物がいます。林則徐という人物です。彼はイギリスのことを知る必要性を感じて、イギリスに関する情報を集めるために、英語のできる部下に命じてまとめさせたのが『四洲志』です。1839 年にはまとめとされています。出版されたかどうかがよくわかっていませんが、この時は「沙土比阿」として紹介されたました。中国でも『四洲志』にシェイクスピアが紹介されていたことが受容史研究の中で再評価されているようです。当時、この本が日本に輸入された記録はありません。その後、清とイギリスの間にアヘン戦争(1840~1842)が勃発します。

日本でシェイクスピアが初めて紹介されたのは 1841 年に出版されたリンドレイ・マリ/澁川六蔵訳『英文鑑』で、「シャーケスピール」として紹介されています。『英文鑑』、「えいぶんかがみ」と読みますが、英語の英文法書がオランダ訳されたものから日本語に訳されたものです。まだ、鎖国中の 1841 年に英文法書が登場するわけですから、幕府も国際化に向けて準備していたということになりますね。日本の英語研究が

着々と進んでいたことがわかります。日本にネイティブ・スピーカーとして英語を教えたのはアメリカ人のラナルド・マクドナルドという人です。彼は1848年に北海道の利尻島に遭難したふりをして上陸します。当時はまだ鎖国中でもあり、当然幕府方によって拘束されることになります。以前であれば斬殺ということもあったかもしれません。しかし、すでに隣国中国のアヘン戦争の脅威を感じていた幕府はかつて英語学習・研究を命じたいた者達がこのラナルドを面会することについては禁止しなかったようです。表向きは投獄されたラナルドの面会でしたが、もうそこは生きた英語の授業となったわけです。ラナルドは日本で初めて英語を母語とするネイティブ・スピーカーとして英語を教えたということになります。ジョン万次郎(中浜万次郎)が日本に帰国したのは1851年のことですから、それよりも前のこととなります。ジョン万次郎については取り上げられることが多いのですが、ラナルドについては英語教育史の中でも取り上げる研究書とそうでないものがあります。ラナルドもジョン万次郎も英語が必要とされていた時期に日本に来たあるいは帰国したことが幸いしたことになります。

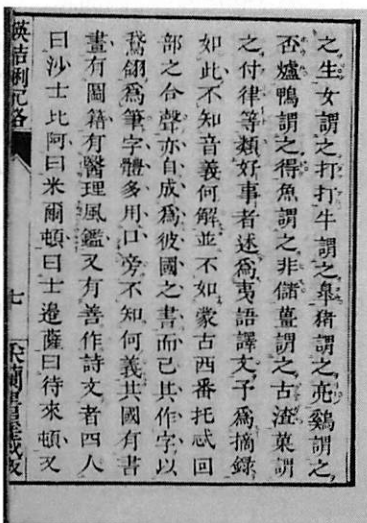
1853年にはペリー来航、1854年には日米和親条約と日本も世界に扉を開かざるを得ない状態となります。1853年には陳逢衡／荒木審訓読『英吉利紀略』が翻刻されます。アヘン戦争の影響からイギリス研究が進んでいたひとつの事例です。その中で「善作詩文者四人」という表現があります。この4人の中のひとりとしてシェイクスピアが紹介されているのです。

Shakespeare

沙士比阿

Milton

米爾頓



Spencer

士邊薩

Dryden

待來頓

その後の英語学習・英語研究の背景を見てみると次のようになります。

1858 年 英語伝習所を開設

1858 年 日米修好通商条約

1859 年 中浜万次郎『英米対話捷徑』

1860 年 蕃所調所で英学が正科となる

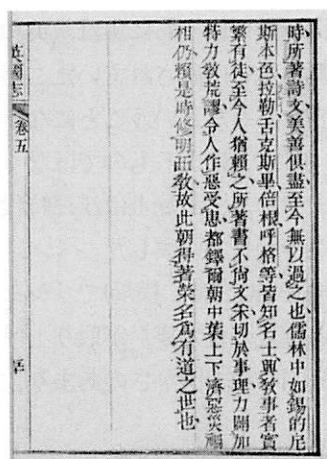
英学が正科となった意味は江戸時代で幕府が対象とする外国研究が蘭学から英学になったということです。幕府も下準備としてオランダ通詞に英語を学習・研究させていましたが、正科になるまで半世紀かかったことになります。しかし、正科となったからといってすぐに英語文献が扱えたわけではありませ。そのことはイギリスを紹介する文献が相変わらず漢籍書であったことを見れば明かです。

1861 年 慕維廉（ウィリアム・ミュアヘッド）『英国志』（翻刻）

* 「舌克斯畢」として紹介される

「著詩文美善俱儘」として6人の作家が紹介されています。

錫的尼	シドニー
斯本色	スペンサー
拉勒	リリー ⇒ ローリー
舌克斯畢	シェイクスピア
倍根	ベーコン
呼格	フォード ⇒ フッカー



⇒のあるところは中国のシェイクスピア受容研究者がリリー、フォード

としているところで、私が疑問に思っているところです。これはもともとの英語の原書を見ますと、リリー、フォードではなく、ローリー、フッカーとあります。

さて、これまでの日本におけるシェイクスピアの紹介をまとめておくと次のように整理できます。

- ・江戸時代の漢籍を除けば、外国語は蘭語（オランダ語）から英語へ
- ・英国を知るために訳したものにシェイクスピアの記載がある。シェイクスピアはイギリスにとってはまさに国家ブランド

幕末でも英語への関心度はますます高まっていることがわかります。

1863 年 洋学調所を開成所と改める

1863 年 『英吉利文典』

J.C.Hepburn／岸田吟香共編『和英語林集成』

*日本で最初の和英辞典

江戸時代にうちに実は、英和辞典、和英辞典、英文法書が日本として編纂あるいは訳されていたことになりますので、開国＝国際化の中心は英語にあったということになります。

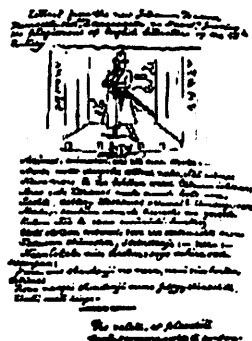
日本人によるものではなく、日本人がその場にいたかどうかともわかりませんが、記録上は江戸時代にシェイクスピアに関するパフォーマンスが行われていました。ベンジャミン・シアーが 1866 年 2 月 19 日に生糸検査場(72 番、横浜)で「シェイクスピアの朗読」として『ハムレット』と『夏の夜の夢』が取り上げていたというのです。西洋人が日本という異国の地で懐かさのあまり、こうした催し物を行ったのかもしれませんが。

②明治・大正から戦前

明治時代におけるシェイクスピアを考える時、移入期という区分を便

宜的に設けることが多くなっています。これは1883年にシェイクスピアの原文からの翻訳が発表された年をひとつの区切りにしているためです。それ以前は断片的なシェイクスピアの紹介及び作品の紹介が主流でした。すべてを取り上げる時間もありませんので、項目を簡単に紹介しておきたい思います。

- 1 高等教育とシェイクスピア
- 2 『西国立志編』
- 3 *The Nagasaki Express*
- 4 *The Japan Punch*
- 5 『葉武列士』と『葉武列士倭錦絵』
- 6 「胸肉の奇詠」
- 7 「新約繁昌記」
- 8 『李王』稿本



受容史の研究ではだいたい取り上げられているところですが、外国人教師から受けた影響が大きかったことは、後年の坪内逍遙の活躍を見てもわかります。

注目しておきたいのは翻訳と翻案の関係です。また、翻訳は当初はラム『シェイクスピア物語』を翻訳したものから始まっていますので、次の3点にはこだわっておく必要があるかもしれません。

- 1 『シェイクスピア物語』
- 2 原文からの翻訳 (1883・1884年)
- 3 宇田川文海のシェイクスピア翻案物

1883年はシェイクスピアの原文からの翻訳が初めて発表された画期的な年でした。河島敬蔵が原文の逐語訳として『欧州戯曲ジュリアス、シーザルの劇』と題して、『日本立憲政党新聞』に2月27日から4月11日にわたって連載しました。その後、坪内逍遙も『該撒奇談自由太刀餘

波鋭鋒』(東洋館、1884年5月)を發表しました。

私はここには2つの隠された問題があると思っています。第1に逍遙の翻訳に対する考え方、第2に何故、『ジュリアス・シーザー』を取り上げたのかということです。

第1点については、『該撒奇談自由太刀餘波鋭鋒』の「附言」を見てみましょう。



原本はもと臺帳の粗なる者に似て、たゞ臺辭のみを用ひて綴りなしたる者なれば、所謂戯曲にあらず。こゝの院本とは全く體裁を異にしたる者なるを、今此國の人の爲めにわざと院本體に譯せしかば、原本と比べ見ば或は不都合の廉多かるべし。見ん人これを諒せよ。

これは1884年段階での逍遙のシェイクスピア劇の理解ということになります。日本のそれまでの歌舞伎・能・狂言は「戯曲」ということになり、西洋演劇を代表するシェイクスピア劇は台詞のみで書かれているため、シェイクスピア劇は「戯曲」ではないということになります。「戯曲」の意味の原点は中国に由来します。逍遙の考えていた「戯曲」は舞踊や雑技、「曲」は歌謡の意味で、その特徴としては劇中に舞踊や歌謡が用いられていました。日本の伝統である能狂言、歌舞伎はその意味で戯曲です。能狂言、歌舞伎からこの要素を抜いてしまえば能狂言、歌舞伎自体が成立しない状態となってしまいます。逍遙の戯曲観にこうしたことが根底にあるとすれば、シェイクスピアに代表される西洋演劇を「戯曲」と呼ぶのは難しいかもしれません。逍遙は自身の理解と読者への配慮があったと考えられる。1884年頃の逍遙の演劇観は日本の伝統である能狂言、歌舞伎と同様に西洋演劇をとらえようとしたということにあります。しかし、逍遙は同時にシェイクスピア劇を、台詞を中心にした劇であるとの認識をしていたことは、西洋演劇の本質をとらえていることにもなります。

第2点については何故、『ジュリアス・シーザー』を取り上げたのか

ということについては世情と「自由」という言葉に注目しておきたいと思います。河島敬蔵にしろ、坪内逍遙にしろ、両者がまず『ジュリアス・シーザー』の翻訳に取りかかったことは単なる偶然でしょうか。1882年には板垣退助が刺されるなどの事件も起こり、その後さらに1901年には星亨は東京市庁参事会室内で刺殺された背景もあります。星亨は1872年に『海外万国偉績叢伝』を翻訳し、その巻3には「羅馬國大將シーザル前傳、本傳」が入っています。1882年には板垣退助が刺されるなどの事件も起こり、その後さらに1901年には星亨は東京市庁参事会室内で刺殺された背景もある。星亨は『海外万国偉績叢伝』（1872）を翻訳した巻3の「羅馬國大將シーザル前傳、本傳」が翻訳されている。また、星亨は巻7の「文学の部」で「英吉利国文士シェキスピール伝」を入れる予定でしたが実現に至らなかった経緯があります。このことはシェイクスピア受容研究では取り上げられていないところです。『ジュリアス・シーザー』と同じように政治色が強く、民主制と貴族制の対立劇である『コリオレイナス』が1888年に板倉興太郎訳『豪傑一世鏡』として世に送り出された背景として、自由民権運動の影響を指摘することは難しいことではありません。副題には「自由の答恩愛の継」（じゅうのしもとをんあいのかづな）とあります。この時期、自由民権運動もありますが、「自由」という言葉は一種の流行言葉であり、翻訳の時にその言葉を題名として利用したとしてもおかしい話ではありません。

さて、翻訳の時代を迎えながら、翻訳にこだわった宇田川文海にも注目しておきたいと思います。

〔1〕「何桜彼桜銭世中」（『ヴェニス商人』の翻案）

『大阪朝日新聞』（1885年4月10日～5月20日）にわたり33回連載され、1886年1月には和田文宝堂より単行本として出版されました。日本人が初めて上演した演目で1885年5月、大阪戎座、中村宗十郎一座。

〔2〕「四つの緒」（『お気に召すまま』の翻案）

『大阪朝日新聞』（1888年5月12日～7月12日）にわたり無署名で45回（45曲）連載されました。後年改題されて、『汝所好』（駸々堂、1888年12月）として出版されたものです。

〔3〕「悪因縁」（『ロミオとジュリエット』の翻案）

『大阪朝日新聞』（1889年6月15日～7月9日）にわたり、半痴居士の名で20回連載されました。

〔4〕「阪東武者」（『オセロ』の翻案）

『大阪毎日新聞』（1892年9月19日～10月19日）にわたり31回連載されました。

〔5〕「船戦」（『マクベス』の翻案）

『大阪毎日新聞』（1894年12月17日～1895年2月5日）にわたり45回連載されました。

〔6〕「悪縁」（『ロミオとジュリエット』の翻案）

『大阪毎日新聞』（1897年11月3日～12月25日）にわたり50回連載されました。

翻訳の時代になぜ宇田川文海は新聞連載として翻案物シェイクスピアを発表し続けたのでしょうか。宇田川文海は、外国語はできなかったようですが、時代物へのアレンジには優れた力を発揮しました。それは庶民のための娯楽に終始したのではないのでしょうか。

宇田川文海がこうした翻案を発表していた時期は演劇改良運動の頃でした。中心人物は伊藤博文の娘婿である末松謙澄で、1886年8月に演劇改良会を設立しました。伊藤博文、渋沢栄一など当時の政・財・学界の名士の賛同を得て、歌舞伎の高尚化、上品化、作者の地位向上、洋風新劇場の建設を提唱しました。当時の文献には次のように記されています。

第1に従来演劇の陋習を改良し、好演劇を実際に出さしむる事、第2は演劇脚本の著作をして榮譽ある業たらしむる事、第3は構造完全にして演劇其他音楽会、歌唱会等の用に供すべき一演技場を構造する事である。

坪内逍遙は1886年10月に『劇場改良法』を発表し、その中で脚本の改良を第1にすべきであると主張しました。つまり、演劇改良運動とは違って脚本を重視したのです。坪内逍遙がシェイクスピアに取り組んだのは、シェイクスピアを日本に移植することが最終目的ではなく、シェイクスピアの戯曲を通して日本演劇の向上を目指していたのです。坪内逍遙が『劇場改良法』を発表した1886年から約20年を経て、1906年2月17日に文芸協会の発会式が行われました。同年11月には歌舞伎座の第1回演芸部大会で坪内逍遙訳『ベニスの商人』の「法廷の場」が上演されました。1911年2月11日に文芸協会は組織を変更し、「我が劇界の刷新を計り時代に適応すべき新芸術を振興すると共に社会の風尚を高むるを目的とす」としました。

この時期に翻訳のシェイクスピア全集が登場してきます。

戸沢姑射・浅野馮虚『沙翁全集』（1905～1909）全10巻、大日本
図書株式会社

坪内逍遙訳『沙翁傑作集』から『沙翁全集』（1909～1928）、早稲田
大学出版部

最も注目すべきは逍遙の翻訳のスタイルの変化です。

第1期 1883年の頃の「浄瑠璃まがいの七五調」の自由訳。

第2期 1895-1896年は注釈を本位とした翻訳で、逐語訳につ
めた雅文調。

第3期 1908-1909年頃の文芸協会の実演を目的にした試訳であ

ったが、歌舞伎調の七・五調、能の狂言口調だけは捨てかねた文体。

第4期 文語口語錯交時代。

第5期 現代語本位訳の時代。

1913年に文芸協会が解散すると、島村抱月と松井須磨子の芸術座、東儀鉄笛と土肥春曙の無名会、そのほかにも文芸座、近代劇協会、劇術会が発足されました。劇術会は逍遙系の劇団で劇術会のシェイクスピア劇上演は、大正時代の中で最も多くシェイクスピア劇を上演した劇団です。1921年2月の『ヴェニスの商人』にはじまり、1924年6月の『ハムレット』まで4作品を少なくとも11回公演していることは明らかなです。大正時代は逍遙の全集の刊行中というプロセスの中、初訳の発表、近代劇全盛の中、劇術会は継続的にシェイクスピア劇を上演し続けたことに大きな意味があります。

昭和戦前のシェイクスピア大事業といえ次の2つがあります。

(1) 1928年の坪内逍遙訳『沙翁全集』の完成

(2) 1930年の日本シェイクスピア協会設立

個人でシェイクスピア劇、ソネット、詩篇を翻訳した坪内逍遙の大偉業があつて、日本もシェイクスピア研究の国となったのです。日本シェイクスピア協会の市河三喜会長の発会式の式辞で「対外的なもの」として次のようなことを述べて入います。

我々は日本シェイクスピア協会をつくりまして、この世界的大文豪を共同的に研究し、且つ又諸外国のシェイクスピア協会と連絡を計りまして内に於ては Shakespeare に関する文献及び資料、殊に日本に於ける文献及び資料を蒐集いたしまして、日本に於ける研究の中心となつて、Shakespeare の研究及び鑑賞をより廣く普及し、より深めて進めて行くことに努力いたし、而して此目的を達成する為に

或は講演、或は出版、或は戯曲の上演、活動写真の上映、その他諸種の計画を実行しようと致して居ります。

大正時代は近代劇全盛時代で、シェイクスピア劇上演は日本の演劇界の主流からはずれた時代でした。昭和初期のシェイクスピア劇上演の大きな特徴は戦後のシェイクスピア劇上演で活躍する人々を育てた時代だといってしまうのも過言ではないでしょう。戦前にシェイクスピア劇上演を上演した劇団等を紹介しておきましょう。

- ①新築地劇団
- ②前進座
- ③地球座
- ④日本俳優学校
- ⑤文学座
- ⑥俳優座
- ⑦松竹少女歌劇部
- ⑧宝塚少女歌劇団
- ⑨日本女子大学シェイクスピア劇

日本俳優学校と日本女子大学シェイクスピア劇は厳密には劇団ではありませんが、戦前のシェイクスピア劇上演史を見れば、その重要性は明らかです。

③戦後～1990年

戦後のシェイクスピア劇上演は1946年6月6日の『真夏の夜の夢』（坪内逍遙訳・土方与志演出、東京芸術劇場・東宝共同製作）で、帝国劇場で上演されました。『真夏の夜の夢』が上演された理由として、戦後の暗い雰囲気を払拭するために上演されたと紹介しているものをよく見かけますが、本当にそうなのでしょうか。私はこの時に日本がおかれた状況を考えると、もっと奥深い演劇界の状況も捉えるべきではないかと

思います。当時はGHQにより日本の伝統文化、仇討物の上演が禁止されていて、1946年6月、10月に『勸進帳』、『熊谷陣屋』の上演が許可され、1947年11月に『仮名手本忠臣蔵』全幕通し上演が許可されました。1947年11月に戦後の占領軍総司令部による歌舞伎（古典演劇復活）の弾圧が終わることとなりました。その後すぐにシェイクスピアの『ハムレット』が上演されることとなります。これにはフォービアン・パワーズが歌舞伎復活の鍵を握っていたことは周知の通りですが、シェイクスピア劇の『ハムレット』がは仇討ち物が解禁になってから上演されるようになった背景には複雑なものを感じます。戦後初の『ハムレット』上演は1947年11月13日～30日に帝国劇場で行われました。

東京青年劇場

森芳介脚色・訳／宮田輝明・木下徹演出

ハムレット 春日章良

オフィリヤ 田湖章子

劇団として戦後すぐにシェイクスピア劇上演に取り組んだのは宝塚歌劇団と前進座です。宝塚歌劇団は1947年に『真夏の夜の夢』、1949年に『ハムレット』、1950年に『ロミオとジュリエット』を上演しています。

戦後の歌舞伎、能楽界にも新しい動きがありました。新作への取り組みです。西洋文学を取り入れた新しい動きが見られ、シェイクスピアもまたその中のひとつとなりました。1950年代には次のような作品が発表されました。

1952年 片山博通・新作狂言『二人女房』

初演（『ウィンザーの陽気な女房たち』翻案）（菊地善太の研究による新しい発見）

1952年 三宅藤九郎・新作狂言『ぢゃぢゃ馬馴らし』執筆

1952年 文楽『ハムレット』道頓堀文楽座

1961年には第二次日本シェイクスピア協会が新たにスタートすることになりました。中島文雄の挨拶の中で「協会の目的」が述べられていました。

第1に英文の研究年鑑の発行ということが挙げられておりますが、これには諸学者の寄稿が必要であり、また出版費の問題もありますので、大いに努力を必要といたしますが、是非実現させたいと考えております。

次に国内研究者の連絡をはかるための会報の発行であります、本協会の存在を周知していただくためにも、なるべく早い時期に第1号を出す予定にしております。

第3に催し物のことでありますが、、

(省略)、、、シェイクスピア劇の上演をも計画いたしたい考えであります。

当時の日本の状況は次の通りでした。

1964年 東京オリンピック

1966年 ビートルズ来日公演

1970年 大阪・万国博覧会

1970年 ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー (Royal Shakespeare Company)の来日公演

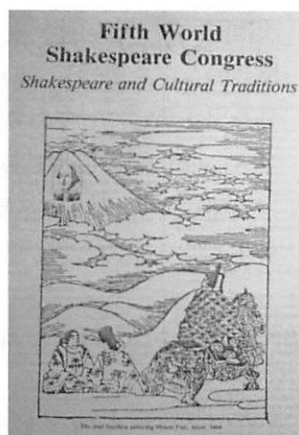
1975年 エリザベス女王来日

シェイクスピア生誕400年がちょうど東京オリンピック開催年でした。戦後のシェイクスピア翻訳も木下順二、福田恆存、大山俊一、大山敏子などが発表しましたが、小田島雄志による翻訳全訳も1980年に達成されました。これには1975年5月の『十二夜』を皮切りにしたシェイクスピア・シアター（主宰者：出口典雄）による全作品上演にもつながりました。全作品上演達成は1981年でした。全訳達成と全作品上演が達

成されたこととなります。ジーパンシェイクスピアに代表されるように、シェイクスピアを棚上げして高尚化せず、「みんなのシェイクスピア」としたシェイクスピア・シアターの全作品上演、小田島雄志の時代に合った全訳の登場となったわけです。映像によるシェイクスピアも定着へNHK シェイクスピア劇場（BBC シェイクスピア）の放映が開始され、この1980年まで全37編を放映され、シェイクスピア・ブームと到来といった雰囲気ありました。

④1991年以後

1991年8月の第5回国際シェイクスピア学会東京大会のが開催されました。統一テーマは「シェイクスピアと文化的諸伝統」で、シェイクスピアの受容は国や文化により多様化しており、世界が日本のシェイクスピアに注目しました。以降、日本人による日本のシェイクスピア研究が表舞台へ登場することとなります。私自身が国際大会に出席していて注目されたのではないかと感じたものは次の2点です。



- 1 黒澤明監督の『蜘蛛巣城』と『乱』は日本ではどのように評価されているのか？
- 2 歌舞伎・能・狂言・文楽とシェイクスピアの演劇的接点は何？

特に1991年以降、「日本のシェイクスピア研究」が専門学会でも特定分野として認められるようになりました。

ここで佐々木の研究をちょっと紹介しておきます。1984年以来「日本のシェイクスピア」に注目してきました。基礎研究として「日本シェイクスピア書誌」に取り組み、記録の確認等を行い、さらに上演史やシェイクスピア映画にも注目してきました。その中で次のようなことが気に

なってきたのです。

- 1 近代日本の西洋化の文化面(演劇)でのお手本がシェイクスピア。
- 2 新しいものを取り入れるためには日本古来のものとの比較等から始まった。
- 3 テーマで類似したものはないか?
- 4 『ロミオとジュリエット』はいわゆる 「心中もの」との接点から比較的早くから紹介。
- 5 『ハムレット』は復讐劇の系譜から、日本の仇討ものとの比較から取り上げられる。⇒『赤穂浪士』も『ハムレット』の翻案のようにして取り上げられたこともある。

日本がシェイクスピアを受容するプロセスとしては次のようなことがありました。

- 1 上演では早くから分かりやすくする日本風のシェイクスピア劇が上演されていた。
- 2 研究では西洋のシェイクスピア研究を紹介することが中心であった。
- 3 シェイクスピア翻訳全集の誕生や学会の誕生により、シェイクスピアが文化的にも日本のものになってきた。
- 4 日本のシェイクスピアは受容から変容の時代に入り、変容したものが更に里帰りする時代になってきた。

シェイクスピアを考えるにあたり、私は次の言葉が大事だと思っています。まずシェイクスピアのハムレットの台詞。

the purpose of playing, whose end, both at the first and now, was
and is, to hold, as 'twere, the mirror up to nature;

そして、ベン・ジョンソンのあの有名なフレーズ。

He [Shakespeare] was not of an age, but for all time!

私は少し言い方を変えて次によいにも考えています。

He [Shakespeare] was not of a culture, but for all cultures.

あるいは、

He [Shakespeare] is not of a culture, but for all cultures.

と、言ってもよいかもしれません。

3 日本のシェイクスピアを考える

私は日本のシェイクスピアには6つの考え方が重要ではないかと考えています。日本のシェイクスピア受容研究をする上で励みになるものと同時に奥深いものがあります。

第1に坪内逍遙「日本に沙翁劇を興さんとする理由」(1910)の「第三に沙翁劇を日本人の心で別途に解釈を試みるといふことは、世界文芸上の一つの貢献であると思ふ。」

第2に坪内逍遙「国訳沙翁劇の上演は可能か、不可能か？」(1933)の「われわれはわれわれの立場から、われわれの解釈、われわれの趣味に依って、われわれみづからの為の演出を試みるがよい。日本人の立場から。これは(文芸協会当時の)私自身のモットーである」

第3に三好弘『シェイクスピアと日本人のこころ』(公論社、1983)の「シェイクスピアを読んで考えるとは、日本人のこころで新しい意味を見透すことである」

第4に河竹登志夫「最終講義 比較演劇学の原点」(1990)の「他の

ジャンルではあまりないかもしれませんが、直接の感覚の比較です。影響比較、対比比較はどれも主として文献的な比較になりますが、演劇の場合はこれに視覚、聴覚での比較が当然伴ってきます。」つまり、演劇は総合芸術であるため感覚も重要だということです。

第5に高橋康也 *The Opening Speech* (第5回国際シェイクスピア学会東京大会、1991)の「one of the first cultural items to be imported and reproduced was Shakespeare.」

第6に荒井良雄『戦後日本のシェイクスピア』(2011)の「二種の翻訳シェイクスピア全集を持ち、三つ目の完結が近づいている翻訳大国の日本には、全国津々浦々に大小さまざまな演劇空間が出来ていて、上演や朗読などを、美術や音楽や映画と同様、市民のだれもが楽しめる文化環境が現出している。日本は演劇大国にもなっているのだ。」

4 世界と日本

世の中全体を見てみると、次のような図式がある種、成立します。

1 国際化 (Internationalization)



2 グローバリゼーション(Globalization)



3 グローカリゼーション(Glocalization)

第1の「国際化」について考えてみたいと思います。言葉から見てみると *Internationalization* は *internationalize* の名詞形です。動詞としてみてみると、*internationalize* は他動詞なので、外圧 (外部からの影響) により国際化するということが前提にあるのではないのでしょうか。日本の国際化はすべて海外からの外圧により生じたもので、フェートン号事件、ペリー来航はその典型な例と言えます。国際化の象徴が言語に表れ、漢語から蘭語、そして英語へと変遷しています。シェイクスピアの紹介

もこうした中で行われました。

第2の「グローバリゼーション」はあえて日本語に訳すとすれば、「地球化、全球化⇒世界中が画一的に進む状態」ということになります。つまり、世界中が同じ規格で統一的に進む様相を言及することになります。ではシェイクスピアの理解や上演はそれでよいのでしょうか。

第3の「グローカリゼーション」は **Globalization + Localization** の概念から生まれた用語で **Glocalization** となりました。均質性を求める「グローバリゼーション」と地域化（個別化）を求める「グローカリゼーション」という相反する考え方を同時に行おうとする考え方と言ってもいいかもしれません。矛盾する2つの考え方を同時に進めるというのはある種日本人の得意技かもしれません。Think globally, act locally「グローバルに考えよう、ローカルに行動しよう」とよく表現されますが、actを別の意味で考えれば、「グローバルに考えよう、ローカルに演じよう」ということになります。シェイクスピアの受容は日本の西洋文化の受容そのもので、蘭語から英語へ、西洋理解、文明開化のアイテムとしてシェイクスピアが注目されたのもこうした背景に基づいていると思えます。明治時代には日本風にアレンジしたシェイクスピア劇上演がはやり、やがて、国際化に向けて西欧の上演を日本でも演出を同様にして上演するようになったことはグローバリゼーションの兆しとも言えます。

5 2つの最近の傾向

シェイクスピア劇上演では日本文化を意識して多様化する傾向にあります。また、ローカリゼーションを意識してというよりは、日本人としてのIdentityを重視した上演（朗読を含む）が目立つようになりました。

最近の傾向の第1は、以前より日本の伝統芸能によるシェイクスピア作品を上演していた試みがありましたが、継続的に上演が行われています。一過性の上演ではなくなっている傾向があります。分野別にその一部だけですが紹介しておきましょう

①狂言

- [1]片山博通『二人女房』
- [2]三宅藤九郎『ちゃちゃ馬馴らし』
和泉元秀『ちゃちゃ馬ならし』
- [3]荒井良雄
- [4]ダン・ケニー
- [5]関根勝
- [6]高橋康也『法螺侍』等

②能

- [1]鈴木忠志
- [2]上田邦義
- [3]栗田芳宏
- [4]泉紀子
- [5]足立禮子

③歌舞伎・人形浄瑠璃

- [1]『NINAGAWA・十二夜』
- [2]結城座
- [3]文楽シェイクスピア『ハムレット』、『天変斯止嵐后晴』、『不破留
寿之太夫』

④日本舞踊

- 花柳寿小雪『マクベス夫人』

⑤落語

- 古今亭志ん輔「シェイクスピアを楽しむ会」

⑥その他

- [1]蜷川幸雄

- [2]鳥獣戯画 歌舞伎ミュージカル
- [3]オペラシアターこんにゃく座
- [4]福田恆存『明智光秀』
- [5]河合祥一郎『国盗人』
- [6]宝塚歌劇団『冬物語』

⑦映画研究

- [1]『足利合戦』詳細不明
- [2]荒井良平『エノケンの豪傑一代男』
- [3]黒澤明『蜘蛛巣城』
- [4]黒澤明『悪い奴ほどよく眠る』
- [5]加藤泰『炎の城』
- [6]黒澤明『乱』

最近の傾向の第2はひとり芝居・朗読（劇）が盛んに行われるようになったことです。これについても紹介しておきたいと思います。

①ひとり芝居

- [1]五十田安希ひとり芝居
- [2]楠美津香のひとりシェイクスピア

②朗読・朗読劇

- [1]荒井良雄（朗読シェイクスピア全集）
- [2]江戸馨（東京シェイクスピア・カンパニー）
- [3]瀬沼達也（The Yokohama Shakespeare Group）
- [4]サトウ・サラ（S's Players Reading Shakepeare）
- [5]遠藤栄蔵（板橋演劇センター）
- [6]中島淳一（劇団エーテル）

今、なぜひとり芝居や朗読がはやっているのでしょうか。インターネット

やメディアの発達により、仮想現実や映像が氾濫し過ぎたために、「ライブ」感を体験したいという精神状態が高まってきたのでしょうか。私の仮説としては1983年の東京ディズニーランド開演以来、特にショーに対する見方がより身近になり、演劇、ショー、さらにはお笑いなど、パフォーマンスが日常生活に入り込んでくるようになってきたのではないかと。パフォーマンスが身近なものになり、こうしたものを見る機会が増加したのではないかとということ、演劇経験者、放送関係の経験者が積極的に朗読会を開催するようになった背景が影響しているかもしれません。木の背景には劇場を借りて公演するいわゆる劇と違って、朗読であれば、会場は小さくてもよく、会場となる空間が豊富に用意されるようになったことが理由としては大きいのではないかと思います。主催者も観客も費用があまりかかからないといったことも大きな魅力です。

では、観客は何を求めているのでしょうか。そのいくつか考えてみたいと思います。

- 1 「読む」—「聞く」という関係性があらためて注目を浴びるようになった？
- 2 一期一会といったパフォーマンスの持つ性質が注目を浴びている？
- 3 朗読者が多様化していることから、観客に選択肢が増えている。演劇経験者、俳優、声優、アナウンサー、ナレーターといった放送関係者、研究者。さらにはカルチャースクールの延長線上のもの。

インターネット等により告知や情報の発信と受信が簡略となり、イベントが開催しやすくなったこと、さらに人の時間の使い方が多様化してきたことも大きな実は大きな要因ではないかと思えます。観客の中にはネット中心の世代とそうでない世代いますが、TVや映像で見るよりは総じて「リア充」にはライブが重要なのではないのでしょうか。

6 朗読

朗読について触れるとすれば、坪内逍遙の朗読法にまず注目しなければなりません。坪内逍遙は朗読法を機械的読法、文法的読法、論理的読法があるとしています。論理的朗読法は人間研究的読法ということになり、現在の朗読が人間性情を探り、人間研究を主とし、表現力の鍛錬等を目指すとするれば、それはまさに逍遙の目指していたものではないでしょうか。

すでに述べましたように、日本で最初のシェイクスピア劇は来日外国人の個人的な朗読から始まりました。朗読は芝居よりもハードルが低かったのでしょう。主催者が会場を準備したり、演者にとっては確かに芝居をするよりはハードルは低かったのかもしれませんが。シェイクスピアの演劇は観る（見る）のではなく、聴く（聞く）ものとよく言われます。『ヘンリー五世』のプロローグに次のような台詞もあります。

われらのたらざるところを、みなさまの想像力でもって、どうか補って下さい。どうか心広き友人のように寛大な目でわれらの芝居をご覧くださいますように。（小田島雄志訳）

「ご覧くださいますように」は原文ではhear our playとなっています。シェイクスピア劇は「想像力をもって聴くもの」とすれば、朗読はまさにその原点といえるのではないのでしょうか。シェイクスピア劇は聴くものとすれば、シェイクスピア劇の最大の特徴はリズムのある「台詞」ということになります。日本語訳でもこのリズムを生かした翻訳が試みられています。もちろん、音読して初めてそのことがわかることになりますが、こうした朗読にいち早く注目したのが実は坪内逍遙であったのです。坪内逍遙は日本の近代化に伴い、日本にも新しい演劇の必要性を感じました。新しい演劇とこれまでの伝統芸能の共生が当時の日本には必要だったのです。坪内逍遙のこれまでの業績や係わってきたことをざ

っと見てみましょう。

『劇場改良法』(1886)

「功過録としてのシェークスピア」(1894)

朗読研究会設立(1890)

文芸協会設立(1906)

『沙翁全集』(1909～1928)

「日本に沙翁劇を興さんとする理由」(1910)

「活動写真と我劇の過去と将来」(1915)

劇術会によるシェイクスピア劇上演(おもに 1921～1924)

地球座結成(1927)

第1次日本シェイクスピア協会設立(1930)

「国訳沙翁劇の上演は可能か、『不可能か?』(1933)

演劇と映画への注目、演劇と朗読が密接な関係にあることなど、これまで述べてきたことはすべて坪内逍遙が原点となっていることがわかります。そう、今年 2015 年は坪内逍遙の没後 80 年です。坪内逍遙は日本中でシェイクスピアが楽しまれていることをきっと喜んでいると思います。しかし、英語教育が実用英語に偏執するあまり、シェイクスピアの原文で作品を読む機会が大学でもなくなりつつある現状に、きっと「喝」を入れるに違いありません。大学教育でのシェイクスピアの扱いはどうなっているのでしょうか。原語シェイクスピア劇上演を伝統的に継続する大学はごく一部となり、英語教育は実用英語が主流となり、教室から文学英語が消えつつあるのが現状です。TOEIC の点数を上げることが大学の英語教育の目的ではないのですが、コミュニケーション能力向上の名の基に実用英語が重用されています。

さて、教育の目的は何であったでしょうか。

教育基本法

(教育の目的)

第一条　教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び
社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な
国民の育成を期して行われなければならない

教育にとって必要なことは「人格の完成」です。そのためには「こころを豊かにする」ことがまず必要です。性格描写を重視するシェイクスピア劇には人間理解を通してこころに豊かにする側面があるのではないのでしょうか。シェイクスピア劇は人生そのものです。(休憩)

(第2部)

加藤泰監督 映画『炎の城』(1960)

第1部のところでシェイクスピア映画について触れましたが、これまでほとんど取り上げられていないものを紹介したいと思います。



(佐々木所有のビデオのパッケージ表紙)

おもなキャスト以下の通りです。大川橋蔵がハムレットを演じたのですが、三田佳子のデビュー作というところも興味が惹かれます。

王見正人 (大川橋蔵) ハムレット

王見師景 (大河内伝次郎) クローディアス

時子 (高峰三枝子) ガートルード

勝正の亡霊 (明石潮) ハムレットの父の亡霊

六角直之進 (薄田研二) ポローニウス

祐吾（伊沢一郎）レアティーズ

雪野（三田佳子）オフィーリア

多治見庄司（黒川弥太郎）ホレイショー

猿楽演技者A：サホビコの王 ルーシエーナス

猿楽演技者B：サホビメ 劇中の王妃

猿楽演技者C：口上役 序詞役

猿楽演技者D：天皇 劇中の国王

（猿楽演技者として、茂山七五三、茂山千之丞、佐々木千吉他が出演）

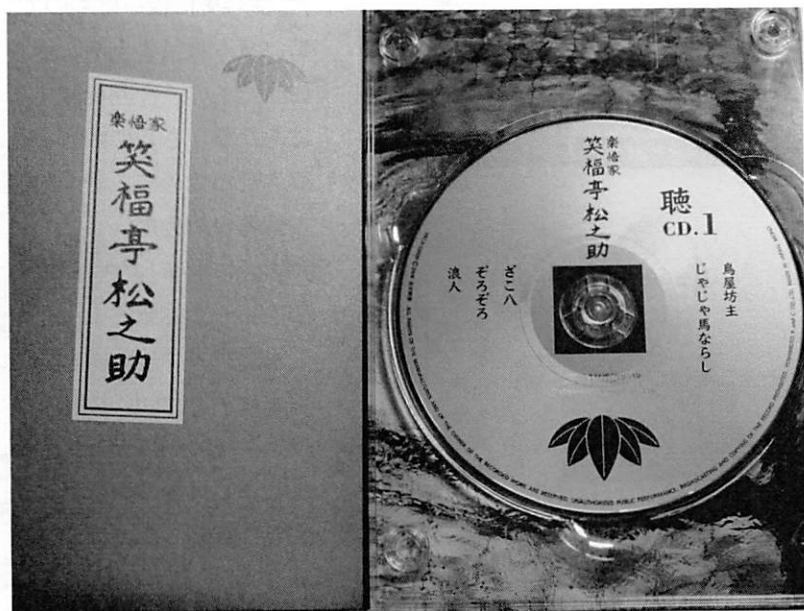
※実際の講演ではここからハムレットが狂気を装いオフィーリアと再会する場面、第三幕第一場の独白(To be or not be)、クローディアス祈りの場面（『炎の城』では菩薩像に加護されながら、安眠している）、劇中劇の場面を抜粋で紹介した。

この映画は加藤泰監督自身が日本版ハムレットとして明言し、『キネマ旬報』でも取り上げられていますが、シェイクスピア映画としてこれまではほとんど取り上げられることもありませんでした。結末が「死なないハムレット」になっているためかもしれません。監督自身が「失敗作」としていることも原因のひとつかもしれません。同じ年の同じ時期に黒澤明監督『悪い奴ほどよく眠る』が封切りにになっていることも気になるところです。

笑福亭松之助 落語「じゃじゃ馬ならし」(1966)

これから紹介するのは落語「じゃじゃ馬ならし」です。シェイクスピアが台詞劇ということから、明治時代には講談としても演じられました。「じゃじゃ馬ならし」は狂言にもなっていますが、話芸という流れでいけば、講談、落語、朗読も同じラインにあるとも言えます。1999年より古今亭志ん輔・シェイクスピアを楽しむ会がシェイクスピア落語を披露

していることも注目に値します。CDに収録されているのは1966年10月14日に大淀ABCホールで収録された笑福亭松之助「じゃじゃ馬ならし」です。収録時間は15分12秒です。実際に落語「じゃじゃ馬ならし」が始まるのは約2分後です。(CDを流す)



(佐々木所有のCD／パッケージ)

活字になっているのをまだ見つけいません。狂言「じゃじゃ馬ならし」でも採用されている場面の落語版になっています。最後に落語の落ちとしてはキャタリーナがペトルーチオに「降伏」ですと言って終わりとなる。当然これは「幸福」と掛けています。この落語はこれまでのシェイクスピア劇上演史では取り上げられていません。

これからもまだあまり注目されていないもの、研究まで至っていないものなどに注目しながら、日本のシェイクスピア受容史に取り組んだいきっていたと思います。本日は長時間にわたりお付き合い戴き、ありがとうございました。

終了

当日の配布資料より

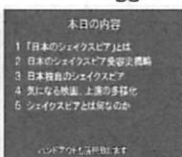
阿佐ヶ谷ワークショップ

2015年3月7日

日本のシェイクスピア受容を通して見る日本文化



発表者：武蔵野学院大学 佐々木隆



資料目次

資料 1	林圀雄『西洋文芸』(1890年).....02
資料 2	板倉仙舟文「蘭文利士の考案」.....02
資料 3	関ヶ原戦史(「中心となる考案」を含む).....03
資料 4	今昔の関ヶ原と研究機関.....10
資料 5	参考文献.....16
資料 6	パワーポイント資料(モノクロ) 監修.....17

この資料の巻末には日本のシェイクスピア受容史を概観する関連年表を掲載した。受容史に絞ったもので、特に日本独特の上演を中心にしたもの。今回掲載するにあたり、さらに内容を充実させるために、若干の追加情報を加えた。

実際に配布した時には劇団の結成、翻訳、上演、研究書等をカラー印刷し、分類したが、今回の掲載ではモノクロ印刷になっている。また、写真等のデータについては省略した。

当日の配布資料の表紙

関連年表

- 1564 ウィリアム・シェイクスピア生
- 1564 ウィリアム・アダムズ生
- 1600 関ヶ原の戦い
- 1600 イギリス人航海士・水先案内人、ウィリアム・アダムズ乗船のリーフデ号、豊後に漂着。
- 1613 クロフ号、平戸に入港。司令官ジョン・セーリス、ウィリアム・アダムズを伴い江戸に赴き、徳川家康と徳川秀忠に謁見

し、ジェームズ一世の親書を渡す。

- 1616 シェイクスピア没
- 1639 オランダと中国を除く外国との交流・貿易の制限（鎖国）
- 1695 近松門左衛門『釈迦如来誕生会』（初演）
- 1771 近松半二『妹背山婦女庭訓』（初演）
- 1808 フェートン号事件
- 1809 幕府、蘭学通詞に英語学習を命じる。
- 1810 四世鶴屋南北・二世桜田治助『心謎解糸』（初演）
- 1810 吉雄権之助『諳厄利亜言語和解』第1冊（焼失）
- 1811 岩瀬弥一郎『諳厄利亜言語和解』第2冊、第3冊（焼失）
- 1811 本木正栄『諳厄利亜興学小筌』
- 1814 本木正栄『諳厄利亜語林大成』
*日本で最初の英和辞典
- 1839 林則徐『四洲志』
*「沙士比阿」として紹介される。出版されたかどうかは不明。（日本に輸入されず）
- 1840 阿片戦争（～1842）
- 1840 リンドレイ・マリ／澁川六蔵訳『英文鑑』（～1841）
*日本で最初の英文法書。「シャーケスピール」として紹介される。（1841）
- 1841 陳逢衡『英吉利紀略』（中国）
*「沙士比阿」として紹介される。刊行されたかどうかは不明。
- 1842 魏源『海国図志』（50巻本）完成（中国）
*「沙士比阿」として紹介される。
- 1844 魏源『海国図志』（50巻本）刊行（中国）
*「沙士比阿」として紹介される。
- 1847 魏源『海国図志』（60巻本）刊行（中国）
*「沙士比阿」として紹介される。
- 1848 ラナルド・マクドナルド、利尻島に上陸

- 1851 ジョン万次郎（中浜万次郎）、帰国
- 1852 魏源『海国図志』（100 巻本）刊行（中国）
*「沙士比阿」として紹介される。
- 1853 陳逢衡／荒木審訓読『英吉利紀略』（翻刻）
*「沙士比阿」として紹介される。
- 1853 Thmas Milner. *The History of England*.
- 1853 ペリー来航
- 1854 日米和親条約
- 1856 ミュア・ヘッド漢訳『大英国志』（中国）
*「舌克斯畢」として紹介される。
- 1856 洋学所を蕃所調所と改める
- 1858 英語伝習所を開設
- 1858 日米修好通商条約
- 1859 中浜万次郎『英米対話捷徑』
- 1860 蕃所調所で英学が正科となる
- 1861 慕維廉（ウィリアム・ミュアヘッド）『英国志』（翻刻）
*「舌克斯畢」として紹介される。
- 1862 蕃書調所を洋学調所と改める
- 1862 堀達乃助『英和对訳袖珍辞書』
- 1863 洋学調所を開成所と改める
- 1863 『英吉利文典』開成所
- 1864 シェイクスピア生誕 300 年**
- 1866 J.C.Hepburn／岸田吟香共編『和英語林集成』
*日本で最初の和英辞典。
- 1866 ベンジャミン・シアー、2 月 19 日に生糸検査場(72 番、横浜)
で「シェイクスピアの朗読」として『ハムレット』と『夏の
夜の夢』を取り上げる。
*日本で最初のシェイクスピア・パフォーマンス。
- 1868 明治維新
- 1874 *The Japan Punch* 掲載のハムレット

- 1883 河島敬蔵訳『欧州戯曲ジュリアス、シーザルの劇』
 (『日本立憲政党新聞』2月27日～4月11日連載)
- 1884 坪内逍遙訳『該撒奇談・自由太刀餘波鋭鋒』東洋館
- 1885 宇田川文海翻案・勝彦蔵脚色・中村宗十郎一座『何桜彼桜銭世中』大阪戎座
 ＊日本人による初めてのシェイクスピア劇上演
 宇田川文海のシェイクスピア (以下は新聞連載年)
 「何桜彼桜銭世中」(『ヴェニスの商人』の翻案) (1885)
 「四つの緒」(『お気に召すままに』の翻案) (1888)
 「悪因縁」(『ロミオとジュリエット』の翻案) (1889)
 「阪東武者」(『オセロ』の翻案) (1892)
 「船戦」(『マクベス』の翻案) (1894)
 「悪縁」(『ロミオとジュリエット』の翻案) (1897)
- 1886 演劇改良会設立
- 1887 天覧劇『勸進帳』他
- 1886 坪内逍遙『劇場改良法』
- 1890 坪内逍遙・朗読研究会結成
- 1892 松林伯円口演・講談『痘痕伝七郎』(『オセロ』)
 ＊平辰彦の研究による。
- 1894 坪内逍遙「功過録としてのシェークスピア」
- 1901 坪内逍遙訳／畠山古瓶脚色『該撒奇談』(伊井蓉峰一座：明治座)
- 1902 高安月郊翻案『闇と光』(『リヤ王』)(福井茂兵衛一座：京都南座)
- 1902 『紅葉御殿』(『ハムレット』の翻案)(秋月桂太郎・山田九州男：大阪朝日座)
 ＊日本人による初めての『ハムレット』劇上演?
- 1903 江見水蔭翻案『オセロ』(川上音二郎一座：明治座)
- 1904 戸澤姑射・浅野馮虚『沙翁全集』日本図書(～1907)全10巻
- 1906 文芸協会設立(1913解散)

- 1907 荒川重秀・沢村宗之助『ジュリアス・シーザー』（洋劇研究会：
神田三崎町東京座）
*最初の日本人による原語上演
- 1909 坪内逍遙訳『沙翁傑作集』⇒『沙翁全集』早稲田大学出版部（～
1928）
*『沙翁全集』は1909年に『沙翁傑作集』としてまず出版
された。『沙翁全集』はもともと『沙翁傑作集』として『ハ
ムレット』から『シムベリン』の20巻の予定であったら
しいが、早稲田大学出版部が全集を希望し、坪内逍遙も残
り19編の翻訳に取りかかったといういきさつがあった。
- 1910 坪内逍遙「日本に沙翁劇を興さんとする理由」
- 1910 坪内逍遙「翻案劇」
- 1911 坪内逍遙訳・演出『ハムレット』（全5幕12番、5月20日～
26日、帝国劇場）
- 1912 近代劇協会結成
- 1913 志賀直哉『クローディアスの日記』（洛陽堂）
- 1913 宝塚唱歌隊結成（現在の宝塚歌劇団の前身）
- 1914 宝塚少女歌劇第1回公演『ドンブラコ』『浮れ達磨』『胡蝶』
- 1914 佐藤紅縁原作『新ハムレット』（日本人製作の舞台の映像化・
シェイクスピア映画）
- 1915 木村鷹太郎『沙翁ハムレットの東洋的材料』名著評論社
- 1915 坪内逍遙「活動写真と我劇の過去と将来」
- 1916 シェイクスピア没後300年**
- 1919 田中栄三監督『オセロ』（日本人製作の舞台の映像化・シェイ
クスピア映画）
- 1919 『足利合戦』（日本人製作のシェイクスピア映画・詳細不明）
- 1921 劇術会によるシェイクスピア劇上演
『ベニスの商人』（1921）、『ハムレット』（1921）
『ベニスの商人』（1922）、『マクベス』（1922）
『ベニスの商人』（1923）、『ハムレット』（1923）

- 『マクベス』(1923)
『ハムレット』(1924)
- 1924 築地小劇場結成・開場
- 1927 加藤長治主宰、地球座結成
- 1928 坪内逍遙訳『沙翁全集』早稲田大学出版部 完成
- 1928 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館開館
- 1930 日本シェイクスピア協会設立(第1次)
- 1930 日本俳優学校
- 1932 山口武美・市河三喜編「日本シェイクスピア書誌」(～1932)
- 1933 竹村覚『日本英学発達史』岩波書店
- 1933 坪内逍遙「国訳沙翁劇の上演は可能か、不可能か？」
- 1933 山口武美『日本沙翁書目集覧』詩仙洞
- 1933 坪内逍遙『シェークスピア研究栞』早稲田大学出版部
- 1934 中央公論出版部編／坪内逍遙校閲『シェークスピア入門』中央
公論社
- 1935 日本女子大学による原語シェイクスピア劇上演開始(～1981)
- 1937 文学座結成
- 1940 Toyoda Minoru. *Shakespeare in Japan*. The Iwanami
Shoten
- 1941 グンドルフ／竹内敏雄訳『シェイクスピアと独逸精神』(上下)
(岩波文庫) 岩波書店
* Gundolf, Friedrich. *Shakespeare und der Deutsch
Geist* の翻訳。
- 1941 豊田実『日本英学史の研究』岩波書店
- 1942 Blyth, R. H. *Zen In English Literature and Oriental
Classics*. The Hokuseido Press.
* 邦題は『禅と英文学』。
- 1943 グンドルフ／小口優、浅井真男訳『シェイクスピア・その本質
と作品』筑摩書房
* Gundolf, Friedrich. *Shakespeare—Sein Wesen und Werk*

の翻訳。

- 1944 俳優座結成
- 1945 太平洋戦争終結
- 1946 坪内逍遙訳／土方与志演出『真夏の夜の夢』（6月6日）帝国劇場
*戦後初のシェイクスピア劇上演
- 1947 森芳介脚本・訳／宮田輝明・木下徹演出『ハムレット』（11月13日～30日）帝国劇場
*戦後初の『ハムレット』上演（戦後の占領軍総司令部による古典演劇の弾圧の終了）
- 1948 関東学院大学シェイクスピア劇英語劇開始（1948～1950 関東学院女子専門学校、関東学院女子短期大学）（原語上演）
- 1949 日本演劇学会設立
- 1950 荒井良平監督『エノケンの豪傑一代男』（シェイクスピア翻案映画）
*これまでのシェイクスピア映画研究では取り上げられていない。
- 1950 近代劇場結成（近代座に改称、1966）
『十二夜』（1950）、『テムペスト』（1950）
『間違ひつづき』（1951）、『ちゃちゃ馬馴らし』（1951）、『真夏の夜の夢』（1951）
『ベニスの商人』（1952）、『むだ騒ぎ』（1952）
『ちゃちゃ馬馴らし』（1953）、『マクベス』（1953）、
『十二夜』（1954）、『真夏の夜の夢』（1954）、『間違ひつづき』（1954）、『ちゃちゃ馬馴らし』（1954）
『テムペスト』（1955）、『ベニスの商人』（1955）、『冬の夜ばなし』（1955）、『むだ騒ぎ』（1955）
『リヤ王』（1955）
『真夏の夜の夢』（1956）
『ベニスの商人』（1957）

- 『ぢゃぢゃ馬馴らし』(1958)、『冬の夜ばなし』(1958)
『リヤ王』(1961)、『真夏の夜の夢』(1961)
『ぢゃぢゃ馬馴らし』(1965)
『ぢゃぢゃ馬馴らし』(1966)
- 1951 サンフランシスコ平和条約
- 1951 ユネスコ加盟
- 1951 日本演劇協会設立
- 1951 日本演劇学会編『シェイクスピア研究』中央公論社
- 1951 同志社女子大学シェイクスピア・プロダクション(原語上演開始)
- 1951 麗澤大学英語劇グループシェイクスピア劇原語上演開始
- 1952 片山博通・新作狂言『二人女房』初演(『ウィンザーの陽気な女房たち』翻案)
*菊地善太の研究による新しい発見
- 1952 三宅藤九郎・新作狂言『ぢゃぢゃ馬馴らし』執筆
- 1952 手塚治虫「鉄腕アトム」(月刊誌『少年』連載開始)
- 1953 TV放送開始
- 1953 劇団四季結成
- 1954 俳優座劇場開場
- 1954 東京演劇アンサンブル結成
- 1954 青年座結成
- 1956 国際連合加盟
- 1956 テアトル・エコー結成
- 1956 文楽『ハムレット』道頓堀文楽座
- 1956 学習院大学シェイクスピア劇研究会(原語上演開始)
- 1957 福田恆存『明智光秀』(文学座・東横ホール)
- 1957 黒澤明監督『蜘蛛巣城』(『マクベス』の翻案)
- 1960 黒澤明監督『悪い奴ほどよく眠る』(『ハムレット』の翻案)
- 1960 加藤泰監督『炎の城』(『ハムレット』の翻案)
- 1960 カラーテレビ放送開始



- 1961 日本シェイクスピア協会設立（第2次）
- 1963 日生劇場開場
- 1963 第1回実用英語検定開始
- 1963 パブリック・リーディング研究会結成
- 1964 東京オリンピック
- 1964 シェイクスピア生誕400年**
- 1964 河竹繁俊『日本演劇文化史話』新樹社
- 1964 日本シェイクスピア協会編『シェイクスピア案内』研究社
- 1964 ケンダル一座来日公演
- 1964 紀伊國屋ホール開場
- 1966 国立劇場開場
- 1966 ビートルズ来日
- 1966 甲南女子大学シェイクスピア劇上演開始（原語上演）
- 1966 笑福亭松之助・落語「じゃじゃ馬ならし」（大淀ABCホール、
10月14日）
- 1967 河竹登志夫『比較演劇学』南窓社
『続比較演劇学』（1974）
『続々比較演劇学』（2005）
- 1968 ロンドン・シェイクスピア・グループ来日公演
- 1970 大阪万博
- 1970 ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー来日公演
- 1971 ジアン・ジャン、演劇公演開始
- 1971 五十田安希ひとり芝居開始
*五十田安希はシェイクスピア作品から独自の発案による
ひとり芝居『マクベス夫人』を生み出し、1971年に上演
を開始したわが国ひとり芝居の先駆者
- 1972 札幌冬季オリンピック
- 1972 国際文化交流基金
- 1972 荒井良雄『シェイクスピア劇上演論』新樹論
- 1972 ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー来日公演

- 1973 ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー来日公演（ピーター・ブルック演出『夏の夜の夢』）
- 1973 西武劇場開場（1986年にPARCO劇場に改名）
- 1974 マンヴェル／荒井良雄訳『シェイクスピアと映画』白水社
- 1975 小田島雄志訳・出口典雄演出のシェイクスピア・シアター全作品上演開始（1981年に全作品上演達成）
- 1976 三宅藤九郎・新作狂言『ぢやぢや馬馴らし』初演
- 1976 SCOT 結成
- 1976 劇団昴結成
- 1978 サンシャイン劇場開場
- 1980 小田島雄志訳『シェイクスピア全集』（白水社）完成
- 1980 NHK シェイクスピア劇場（BBC シェイクスピアの全作放映開始（～1987））
- 1980 板橋演劇センター結成
*1980～2016年でシェイクスピア 37 作品（小田島雄志訳）の上演達成。
- 1981 宗片邦義主宰・能シェイクスピア研究会結成
- 1981 倉橋健編『シェイクスピア辞典』東京堂
- 1982 本多劇場開場
- 1983 東京ディズニーランド開園
- 1983 三好弘『シェイクスピアと日本人のこころ』公論社
- 1985 黒澤明監督『乱』（『リア王』の翻案）
- 1985 青山劇場開場
- 1987 銀座セゾン劇場開場
- 1987 蜷川幸雄演出『NINAGAWA テンペスト』
- 1987 リンゼイ・ケンプ・カンパニー来日公演
- 1987 荒井良雄による朗読シェイクスピア全集（1992年に全作品朗読達成）
- 1988 東京グローブ座開場（現在、運営はジャニーズ事務所傘下の株式会社東京・新・グローブ座が行っている）

*柿落とし公演

*マイケル・ボグダノフ演出による「薔薇戦争七部作」(イングリッシュ・シェイクスピア・カンパニー)

- 1989 東西ベルリンの壁崩壊
- 1989 シアター・コクーン開場
- 1989 シアターサンモール開場
- 1989 安西徹雄編『日本のシェイクスピア 100 年』荒竹出版
- 1990 東京芸術劇場開場
- 1990 東京シェイクスピア・カンパニー結成
- 1990 佐々木隆編『日本シェイクスピア総覧』エルピス
- 1990 ルネサンス・シアター・カンパニー来日公演
- 1990 和泉元秀脚色・荒井良雄演出『じゃじゃ馬馴らし』(和泉宗家)
- 1990 河竹登志夫「最終講義 比較演劇学の原点」
- 1991 第5回国際シェイクスピア学会東京大会
- *統一テーマ「シェイクスピアと文化的諸伝統」
- 1991 高橋康也脚本・野村万作演出・主演『法螺侍』初演
- 1992 山田庄一演出『天変斯止嵐后晴』初演
- 1992 蜷川幸雄、ロンドン・グローブ座芸術監督就任
- 1992 商業用のインターネットサービス開始
- 1992 シェイクスピア・カンパニー結成
- 1992 滝静寿編『シェイクスピアと狂言』新樹社
- 1993 高橋康也、大英帝国勲章 (CBE=三等勲章)
- 1993 松岡和子『すべての季節のシェイクスピア』新潮社
- 1993 荒井良雄『朗読シェイクスピア全集の世界』新樹社
- 1994 Kishi, Tetsuo, Pringle, Roger, and Stanley, Wells, editors.
Shakespeare and Cultural Traditions. Associated University Presses.
- 1994 高橋康也編『シェイクスピア・ハンドブック』新書館
- 1995 佐々木隆編『日本シェイクスピア総覧2』エルピス
- 1996 紀伊國屋サザンシアター会場

- 1996 平辰彦『Shakespeare 劇における幽霊』博士論文
- 1996 松岡和子訳シェイクスピア全集開始
- 1996 荒井良雄『英米文学映画化作品論』新樹社
- 1996 Fujita, Minoru and Pronko, Leonard, editors. *Shakespeare East and West*. Japan Library.
- 1996 国立国会図書館ホームページを公開
- 1997 ロンドン・グローブ座開場**
- 1997 新国立劇場開場
- 1997 長野冬季オリンピック
- 1997 坪内逍遙訳／高瀬精一郎演出『ベニスの商人』（前進座：国立劇場大劇場）
- 1998 松岡和子訳・蛭川幸雄演出による彩の国シェイクスピアシリーズ開始
- 1998 Sasayama, Takashi, Mulryen, J. R., and Shewring, Margaret, editors. *Shakespeare and the Japanese Stage*. Cambridge University Press.
- 1998 高橋康也監修／佐々木隆編『シェイクスピア研究資料集成』（別巻1）（別巻2）日本図書センター
- 1999 日本シェイクスピア協会ホームページ正式公開
- 1999 Anzai, Tetsuo, Iwasaki, Soji, Klein, Holger, and Milward, Peter, editors. *Shakespeare in Japan*. The Edwin Mellen Press.
- 1999 古今亭志ん輔・シェイクスピアを楽しむ会（落語）
『紅屋の商い』（『ベニスの商人』の翻案）
『小言幸兵衛の夢想』（『ロミオとジュリエット』の翻案）
『花のお江戸の半次郎』（『ウィンザーの陽気な女房たち』翻案）
『稲荷町の陽炎』（『夏の夜の夢』の翻案）
『丁稚』（『オセロー』の翻案）
『黒白粉』（『ハムレット』の翻案）

- 『針千本』(『リチャード三世』の翻案)
 『冥利のゆくえ』(『ジュリアス・シーザー』の翻案)
 『寿大尽』(『リア王』の翻案)
 『小豆の仇討』(『マクベス』の翻案)
 『恋は異なるものの味なもの』(『十二夜』の翻案)
 『お伊勢参り』(『終わりよければすべてよし』の翻案)
- 2000 国際融合文化学会
- 2000 瀬沼達也座長 The Yokohama Shakespeare Group 結成
- 2000 楠美津香のひとりシェイクスピア開始 (～2010 年で全作品上演達成)
- 2000 高橋康也他編『研究社シェイクスピア辞典』研究社
- 2001 Minami, Ryuta, Carruthers, Ian, and Gillies, John, editors.
Performing Shakespeare in Japan. Cambridge University Press.
- 2001 佐々木隆『書誌から見た日本シェイクスピア受容研究』博士論文
- 2002 蜷川幸雄、大英帝国勲章 (CBE=三等勲章)
- 2002 高橋康也他編『研究社シェイクスピア辞典』(CD-ROM)研究社
- 2002 荒井良雄他編集主幹『シェイクスピア大事典』日本図書センター
- 2002 上田邦義『Noh Adaptation of Shakespeare: Encounter and Union』博士論文
- 2003 『シェイクスピア大全』(CD-ROM)新潮社
- 2004 栗田芳宏構成・演出のりゅーとぴあ能楽堂シェイクスピアシリーズ開始
- 2004 Schwerin-High, Friederik von. *Shakespeare, Reception and Translation: Germany and Japan.* Continuum
- 2005 Kishi, Tesuo and Bradshaw, Graham. *Shakespeare in Japan.* Continuum
- 2005 佐々木隆『日本シェイクスピア総覧 天保 11 年——平成 14 年』

(CD-ROM)エルピス

- 2005 泉紀子脚本・詞章／辰巳満次郎演出・振付『新才能マクベス』
に始まる能シェイクスピアシリーズ
- 2005 蜷川幸雄演出『NINAGAWA 十二夜』
- 2006 レスリー・ゲントン＝ダウナー、アラン・ライディングア
／水谷八也・水谷利美訳『シェイクスピア・ヴィジュアル事
典』新樹社
- 2006 川田基生『シェイクスピア能研究』博士論文
- 2006 Momose, Izumi. *Japanese Studies in Shakespeare*.
Edwin Mellen Press
- 2006 Fujita, Minoru and Shapiro, Michael, editors. *Transvestism
and the Onnagata Traditions in Shakespeare and
Kabuki*. Global Oriental
- 2007 山茶花クラブ結成
- 2007 日本シェイクスピア協会編『新編シェイクスピア案内』研究社
- 2008 関根勝『狂言とコンメディア・デッラルテ：東西文化融合の
ダイナミズム』能楽書林
- 2008 Theatre Project Si シェイクスピア公演（狂言）開始
『ハムレット』（2008）
『リア王』（2008）
『オセロ』（2009）
『フォルスタッフ』（2009）
『ロミオとジュリエット』（2010）
『マクベス』（2010）
- 2009 荒井良雄『シェイクスピア劇の翻訳と演出』英光社
- 2009 近藤弘幸『シェイクスピア受容史再考—翻訳・ナショナリズ
ム・ジェンダー』科学研究費補助金研究報告書（研究課題
番号 1820065）
- 2010 小林かおり編『日本のシェイクスピア上演研究の現在』風媒社
- 2010 河合祥一郎・小林章夫編『シェイクスピア・ハンドブック』三

省堂

- 2010 荒井良雄企画、日英シェイクスピア・フェルティヴァル開始
- 2010 菊池あずさ『蜷川幸雄の演出理論とその変遷』博士論文
- 2010 サトウ・サラ（佐藤智代）主宰、S's PLAYERS の朗読シェイクスピア Reading Shakespeare 開始
- 2011 荒井良雄『戦後日本のシェイクスピア』英光社
- 2011 荒井良雄編『やさしいシェイクスピア』英光社
- 2013 河合祥一郎『あらすじで読むシェイクスピア全作品』祥伝社
- 2014 宝塚歌劇団、公演開始 100 周年
- 2014 前沢浩子『生誕 450 年 シェイクスピアと名優たち』NHK出版
- 2014 河合祥一郎脚本・鶴澤清治作曲『不破留寿之太夫』
- | | |
|------|-----------------|
| 2014 | シェイクスピア生誕 450 年 |
| 2015 | 坪内逍遙没後 80 年 |
| 2016 | シェイクスピア没後 400 年 |
- 2020 東京オリンピック開催予定

おわりに

講演は一種のパフォーマンスでもあり、消えてしまう。そのため、今回は記録と整理の意味で活字化することとした。また、別の機会に研究として発展する多くのテーマを含んでいる。なお、2015年11月21日にも阿佐ヶ谷ワークショップで「第5回国際シェイクスピア学会東京大会が残したもの」を講演したため、これも活字化する講演録として残していきたいと思う。

著者略歴

佐々木 隆(b.1960)

博士(英文学) (駒澤大学)。現在、武蔵野学院大学副学長、武蔵野学院大学大学院国際コミュニケーション研究科長・教授、武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部教授。早稲田大学演劇博物館招聘研究員。日欧比較文化研究会会長、比較文化史学会理事、日本英語文化学会理事、日本シェイクスピア協会会員、World Shakespeare Bibliography国際委員日本代表、他。

おもな著書・共著

『日本のシェイクスピア』(エルピス、昭和63年)、『日本シェイクスピア総覧』(エルピス、平成2年)、『日本シェイクスピア総覧2』(エルピス、平成7年)、『シェイクスピア研究資料集成』(全30巻+別巻2、日本図書センター、平成9年～平成10年)、(共著)『シェイクスピア大事典』(日本図書センター、平成14年)『CD-ROM版日本シェイクスピア総覧』(エルピス、平成17年)、『日本シェイクスピア研究書誌(平成編)』(イーコン、平成21年)、『日本シェイクスピア研究書誌(江戸時代編)』(イーコン、平成25年)、『江戸時代のシェイクスピア受容』(イーコン、平成25年)、『日本シェイクスピア研究書誌(平成編)(増補版)』(イーコン、平成26年)、『日本シェイクスピア劇上演年表』(多生堂、平成27年)、『日本シェイクスピア劇上演年表(増補改訂版)』(多生堂、平成28年) 他

著 者 佐々木 隆

発行日 平成28年7月1日

発行所 武蔵野学院大学 佐々木隆研究室

〒350-1328 埼玉県狭山市広瀬台3-26-1

TEL 04(2954)6132/FAX 04(2954)6134

ALL RIGHTS RESERVED@TAKASHI SASAKI